

週 報

国際ロータリー第 2660 地区

令和 8 年 9 月 29 日



豊中ロータリークラブ

第 3086 例会

第 2680 号

持続可能なインパクトを生み出そう

広めよう ロータリーの心 地域とともに

創立 1959 年 6 月 16 日

2026～27 年度
国際ロータリー会長
オンライン・ハキーム・パパロラ
トランス・アマディ・ロータリークラブ

Rotary
Toyonaka



2026.7～2027.6
会 長 武枝敏之
副 会 長 眞下 節
幹 事 横田広司
雑誌・広報・会報委員長
宮田幹二

本日（9 月 29 日）のプログラム

「音楽とスポーツに関するイップス対処法」
国立病院機構大阪刀根山医療センター
院長 望月 秀樹 様
卓話担当：松山辰男



次回（10 月 6 日）のプログラム

「衛星クラブについて」
新クラブ結成委員会 委員長 大阪西 RC
近藤 太郎 様
卓話担当：武枝敏之

会長の時間

2026-27 年度 会長 武枝敏之

暑さ寒さも彼岸までといわれていますが、最近は、四季がなくいつの間にか季節が変わり秋はどこに行ったと思う昨今です。地球温暖化の影響での異変により、大規模の災害が発生しております。今年も、石川県や熊本県の大豪雨に始まり、先日の 3 度にわたる関東地方の災害は、テレビの画面に映る映像にこれからどうなっていくのか不安が生じるのは私だけでしょうか。天候だけでなく、日本を取り巻く環境は、政治、経済等難題が山積しています。私は、それらの解決には何の力になることはできませんが、少しでも、微力ですが力になることが出来ればと思っております。本日の卓話は、国立病院機構大阪刀根山医療センター院長の望月秀樹先生をお迎えしております。本日のテーマは「イップス」です。イップスといえば、ゴルフをされる方には「ああ、あれか」と思い当たる方も多いのではないのでしょうか。私もゴルフをしていると、「今日は腕が悪いのか、クラブが悪いのか、それともイップスなのか」と言いたくなることがあります。しかし、実際には単なる技術の問題ではなく、医学的にも大変興味深い現象だそうです。今日は望月先生から、イップスの原因や仕組みについて、専門的なお話を分かりやすくお聞かせいただけることと思います。私たちも年齢を重ねると、思うように体が動かないことが増えてまいりますが、「年のせい」と決めつけず、正しく知ることも大切です。本日はしっかり学び、そして明日からの健康に役立てていただきたいと思います。

四つのテスト 1.真実かどうか 2.みんなに公平か 3.好意と友情を深めるか 4.みんなのためになるかどうか

事務局・例会場：〒560-0021 豊中市本町 3 丁目 1 番 16 号 ホテル アイボリー内
TEL 06-6858-1551 FAX 06-6857-0011
例 会 日 時：毎週火曜日 12 時 30 分より
事 務 局：9 時～15 時（土日祝を除く）
H P ア ド レ ス： <https://toyonaka-rc.jp>
メー ル ア ド レ ス： contact@toyonaka-rc.jp

☆出席報告☆

	第3085回	第3082回
例 会 日	9 月 10 日	7 月 28 日
① 会員数 A	26	26
(内出席免除者)	6	6
② 出席義務者数	20	20
③ 出席義務者出席数	10	11
④ 出席免除者出席数	1	3
⑤ メイクアップ数		3
⑥ 出席義務者欠席数	10	9
出席率 %	52.38%	73.91%

出席率(3085回) ③+④/②+④ 出席率(3082回) ③+④+⑤/②+④

☞幹事報告☞

- ・国際ロータリー第 2660 地区より
「第 55 回ロータリー研究会 第 2 信(クラブ・参加者用書類)」が届きました。
「【お願い】2026-27 年度「END POLIO NOW×スポ GOMI」のご案内および協賛・グッズ購入」が届きました。
- ・大阪北ロータリークラブより
「2026-27 年度第 45 回大輪ゴルフ会開催のご案内」が届きました。

☞掲 示 板☞

- ・第二回 IM 第 1 組会長・幹事会
日 時：2026 年 9 月 30 日(水)
場 所：ガバナー事務所
 - ・R 財団セミナー
日 時：2026 年 10 月 3 日(土)
13:30~16:30
場 所：大阪 YMCA 国際文化センター2 階
 - ・国際奉仕・社会奉仕合同委員長会議
日 時：2026 年 10 月 3 日(土)
10:00~12:30
場 所：大阪 YMCA 国際文化センター2 階
 - ・豊中 RC 秋の親睦ゴルフ開催
日 時：2026 年 10 月 22 日(木)
場 所：よみうりカントリークラブ
※本日、出欠回覧いたします。
 - ・第 1 回ガバナー補佐訪問
日 時：2026 年 10 月 27 日(火) 12:30~
場 所：ホテルアイボリー
- ※例会前 12:00 から事前懇談会(会長・副会長・幹事) 例会終了後に例会場にて協議会があります。

♪ 本日の唱歌 ♪

ありがとうは私から

作詞：堀 昭良 作曲：小西欣一

あなたに出会ったその日から

夢と希望が湧いてきた

弾む心に 広がる笑顔

奉仕の理想に結ばれた

こんな素敵な仲間たち 仲間たち

ありがとうは ありがとうは

私から

唱歌担当：全会員

秋本番

秋本番を迎え、過ごしやすいい日が増える 10 月はもうすぐです。お出かけの計画を立てるのも楽しい時期ですね
ロータリーの会議や行事も 10 月に集中しています。

- ・R 財団セミナー
- ・国際奉仕・社会奉仕合同会議
- ・豊中 RC 秋の親睦ゴルフ
- ・ガバナー補佐訪問

また、ハロウィンなどの行事から、さつまいもや栗といった旬の味覚、コスモスやキンモクセイの美しい花々まで、暮らしを豊かに彩るヒントを知って、実りの秋を心ゆくまで楽しんでください。



国際卓越研究大学無き後の大学改革

大阪大学大学院理学研究科 近藤忠



国が認定する世界トップレベルの研究大学となる「国際卓越研究大学」が公募され、採択に向けて多くの大学が何年もかけて独自の改革計画を進めてきた。第一期公募の採択校である東北大学に続き、第二期の候補大学として京都大学と東京科学大学が認定され、東大は継続審議、大阪大学は残らなかったことが2025年末に明らかになった。坂口志文先生のノーベル生理学・医学賞受賞やマチカネワニの天然記念物指定に沸く大阪大学にとって、この結果は冷水を浴びせられた印象であった。現在、国が行なっている大学への主な支援制度として、国際卓越研究大学の他に「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」がある。国の支援だけでは既に国立大学が成り立たないことは皆知っている。国際的に研究力が高いにも関わらず、国際卓越研究大学に採択されず、J-PEAKSにも入っていない大学は今後どうなるのであろうか。最高学府として研究を極める以外にも社会の様々な分野への人材排出の役目を負う大学の立ち位置には、今後の日本社会が迎える変革の影響も大きい。日本の18歳人口は現在も減少中で、1990年頃に200万人程いた若者は、2035年には100万人を割る見込みである。現在の社会構造を維持するための絶対的な人材不足は極めて深刻である。併せて大学進学率も減少、進学率は6割ほどで頭打ちになるとの見込みらしい。既に社会の至る所に浸透しつつあるAIとの共存も含め、単なる理系人材の不足見込みというだけでなく、今後の日本に何が必要かは国も考えるところであろう。資源の少ない日本が「科学立国」を目指した1990年代の勢いは、古手にとってはバブル時代の到来と共に記憶に鮮明に残っている。その後の日本の経済力の低下とともに国立大学も収支悪化、東京大学でさえ赤字が続き、現場教員の疲弊が進み研究力は低下傾向である。一方、海外では大きな投資を続ける国々が科学力・技術力を高める状況で、第7期の科学技術・イノベーション計画は、強い経済を実現する「新技術立国」の実現に向けて17の成長戦略分野を設定した。この駆動には国際的な競争力を持つ研究大学群の存在が不可欠である。その中身は長らく取り組んできた文理融合・分野横断的研究の促進だけではなく、これまで以上に民間企業との連携や社会実装が求められる。「大阪に総合大学を」という民間の声から設立に至るという独特の出発点を持つ大阪大学は、国際卓越研究大学の候補から外れた後も生き残るための大学改革を続ける方向に舵を切った。直近の国からの大きな支援が見込めない代わりに、本当に必要と思える改革を慌てずに進められる状況でもある。様々な改革は伝統的な研究文化を築いてきた各組織にとって危機と捉える立場もあれば、更なる前進の良い機会と捉える立場もある。既にこの春から大学の組織・システムを統合する複数の「機構」が設置され、本格的な運用に向けた取り組みが始まりつつある。「地域に生き世界に伸びる」を掲げてきた大阪大学も2031年には創立100年となる。社会との連携を深める大阪大学がどのような大学となるのか、変わらぬ支援と共に見守って頂ければ幸いである。

☞2026 年 8 月 18 日の卓話☞

「日本における外国人増加の背景と社会への影響」

元米山奨学生 バストラ・ススミタ

卓話担当：会員増強委員長 岩本 洋子



バストラススミタさん・岩本会員

このたび、「日本における外国人増加の背景と社会への影響」をテーマに卓話をさせていただきました。私は現在、外国人留学生の教育や就職支援に関わる仕事をしています。日々、多くの外国人留学生と接する中で、日本に来る外国人には、それぞれ異なる来日の経路や日本社会との関わり方があることを実感しています。

例えば、留学生の場合、日本語学校や専門学校、大学などで一定期間、日本語や日本の文化、生活習慣を学ぶ機会があります。また、アルバイトを通して日本人と接し、仕事のルールやマナー、時間を守ることなど、日本社会の「当たり前」を実際の生活の中で身につける機会もあります。その後、日本の企業に就職し、人材不足が深刻な企業や業界で働くことも期待されています。

一方、特定技能や技術・人文知識・国際業務などの在留資格で、仕事を目的として直接日本に来る外国人の場合、来日前に日本語、日本文化、社会生活上の常識やマナーを十分に学ぶ機会が限られているケースがあります。そのため、本人に悪意がなくても、日本人にとっては「常識」と考えられていることが理解されず、職場や地域社会でのトラブルにつながる可能性があります。

日本では、少子高齢化と労働力不足を背景に、今後も外国人労働者の受け入れが重要になっていくと考えられます。外国人の増加そのものを問題として捉えるのではなく、どのような人を、どのような準備をした上で受け入れるのが重要です。

外国人の増加の背景だけでなく、入国前の健康・身元確認、学歴や技能、日本語能力などについても課題として取り上げました。また、日本文化やマナーを理解しようとする姿勢も、日本社会で長く生活する上で重要だと考えています。

今後、日本が外国人を必要な人材として受け入れていくためには、単に「人手不足を補う」という考え方だけではなく、来日前から日本語や生活ルールを学ぶ機会を整え、来日後も地域や職場で日本社会を理解できる環境をつくる必要があります。外国人と日本人の双方が安心して暮らし、働くことのできる社会をつくるのが、これからの日本にとって重要な課題だと考えています。